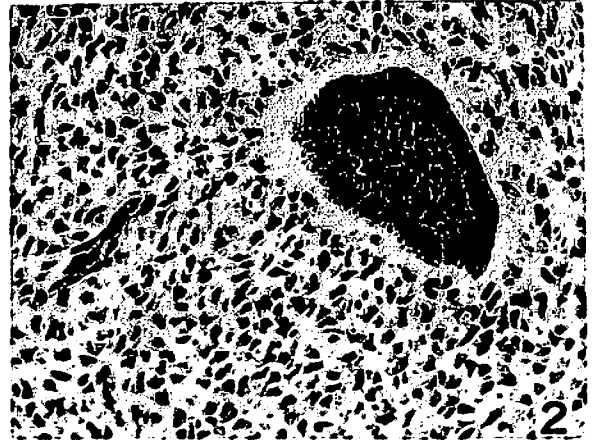


牛のエナメル上皮線維歯牙腫

岐阜大学農学部家畜病理学教室出題

第20回獣医病理学研修会標本No.329



動物：牛，ホルスタイン種，雌，4才。

臨床事項：下顎前歯部の小児頭大膨隆による咬合障害の他には異常は認められない。

剖検所見：腫瘍は左側下顎骨前歯部第1切歯と第2切歯との間に生じ、前歯部を小児頭大に膨隆せしめる。腫瘍部口腔粘膜は手掌面大に剝離し、その周辺部に小豆大ないし大豆大の不整形な硬組織が散在する。腫瘍実質は刀で容易に切断され、灰白色を呈し、充実性で限界明瞭であり、少数の小嚢胞が存在する。

組織学的所見：腫瘍実質の組織像は部位によって様々であるが、歯原性上皮と細胞に富む間葉組織の増殖は全病巣を通じ旺盛である。歯原性上皮は小型の島状のものから狭い索状あるいは大型の濾胞状のものまで著しく変異に富む。大型の濾胞状の上皮巣ではその中央部の細胞は正常にエナメル器におけるエナメル髓様の星状細胞に、辺縁部の細胞は内エナメル上皮に類似する円柱細胞に分化する(図1, HE, $\times 100$)。病巣辺縁部において、かなりの量の歯提様上皮索が口腔粘膜基底細胞層と直接連絡する。歯原性上皮巣を取り囲み歯乳頭を思わせる未分化な間葉組織が極めて旺盛に増殖する(図2, HE, $\times 200$)。この間葉細胞は異形性に乏しく、ミトーゼも認められない。エナメル器様の上皮巣に隣接する間葉細胞は象牙芽

細胞に分化し、まれではあるが、両者の間に象牙前質が形成される。しかし、エナメル器様上皮巣のかなりのものは象牙質の形成前に次第に変性し、小嚢胞化する。象牙質やエナメル質等の形成は病巣辺縁部に比較的良好に見られるが、全体としてはあまり多いものではない。この歯原性硬組織は小型で極めて不整形で、部分的にしか石灰化しないが、象牙細管やエナメル小柱も部位によっては見られる(図3, HE, $\times 100$)。

診断：以上のように、この腫瘍は歯原性の上皮と間葉組織との両者の極めて旺盛な増殖からなり、さらに、歯原性硬組織の形成を伴っているため、エナメル上皮線維歯牙腫と診断できる。

歯原性腫瘍の発生母地としては歯胚、残存上皮あるいは口腔粘膜等が考えられるが、本例の場合、腫瘍の主坐している前歯部の歯は全て正常な形態を有していることから、前歯を形成する歯胚から本腫瘍が生じたとは考えられない。一方腫瘍辺縁部口腔粘膜の基底細胞層から多量の歯提様上皮索が腫瘍実質内へ入り込んでいる像がかなりの頻度で見られた。従って、本腫瘍が口腔粘膜を発生母地として生じ、間葉組織に透導変化をもたらした腫瘍である可能性は充分である。